

## 『ニーベルンゲンの歌』と伝承 (2)

岩井方男

(承前)<sup>\*</sup>

※「『ニーベルンゲンの歌』と伝承(1)」は『教養語學研究』第百二十一号(2006年12月27日発行)に掲載。

### 2. 現存文学作品と伝承

§11 前号において、『ニーベルンゲンの歌』の「昔の物語」と関係深い史料を紹介した。現存する史料の数と多様性から推して、本叙事詩に関連する伝説が、ドイツの地に数多く存在したことが想像できる。

伝説が史書記述の孵卵器であるなら(前号§9)、伝説は文学の孵卵器でもあろう。「昔の物語」に厳密に当てはまる内容が含まれる文学作品は、ドイツの地において現在まで発見されていないが、そのような先行作品が存在した可能性は否定できない。文字化はされなかったが、存在した可能性のほうがむしろ高い。<sup>(1)</sup> また『ニーベルンゲンの歌』とは直接の関係はないが、ニーベルンゲン伝説に由来したり影響を受けたりした文学作品は、各地にそして各時代に、幸いなことにきわめて豊富に残されている。以下に、作品とその内容をできるかぎり多く紹介し、「昔の物語」を考える手掛かりとする。

「昔の物語」の内容を含む現存文学作品群は、それらが成立あるいは発見された場所により、大きく二種類に分けるのが適当である。

第一種はドイツ以外の地に残された資料である。すなわち、アイスランド資料として『エッタ歌謡集』の中の「フンディング殺しのヘルギの歌I」Helgaqviða Hundigsbana in fyrri、「フンディング殺しのヘルギの歌II」Helgaqviða

Hundigsbana qnnor, 「シンフィヨトリの死について」 Frá dauða Sinfjötla, 「グリーピルの予言」 Grípisspá, 「レギンの歌」 Reginsmál, 「ファーヴニルの歌」 Fáfnismál, 「シグルドリーヴァの歌」 Sigdrífomál, 「シグルズの歌の断片」 Brot af Sigurðarqviðu, 「グズルーンの歌I」 Guðrúnarqviða in fyrsta, 「シグルズの短い歌」 Sigurðarqviða in scamma, 「ブリュンヒルドの冥府行」 Helreið Brynhildar, 「ニヴルング族の殺戮」 Dráp Niflunga, 「グズルーンの歌II」 Guðrúnarqviða qnnor, 「グズルーンの歌III」 Guðrúnarqviða in þriðja, 「オッドルーンの嘆き」 Oddrúnargrátr, 「古いアトリ之歌」 Atlaqviða in groenlenzca, 「新しいアトリ之歌」 Atlamál in groenlenzco<sup>(2)</sup>, 「グズルーンの唆し」 Guðrúnarhvotが挙げられる。さらに『ヴォルスング一族のサガ』 Völsungasaga<sup>(3)</sup>, 『ベルンのシズレクのサガ』 Þiðreks saga af Bern<sup>(4)</sup>が、アイスランドに残された作品である。古英語により残された『ベーオウルフ』の中にも、龍殺しの英雄についての若干の言及がある。シェトランド諸島の西に位置するフェロー諸島では、輪舞の歌詞の中に、ジークフリート（混乱を避けるため、本論文の中では複数の表記を適宜用いる）およびブルグントの英雄たちが生き残っている。<sup>(5)</sup>大陸においては、デンマークの古謡の中にその痕跡が見られる。<sup>(6)</sup>

第二種はドイツの地に残された資料である。『ニーベルンゲンの歌』に先立つ作品として『ヴァルターリウスの歌』 Walthariusがある<sup>(7)</sup>。『ニーベルンゲンの歌』より後の時代に成立した作品にはこの叙事詩の残照も存在するであろうが、そればかりでなく、「昔の物語」の内容が反映している可能性がある。この観点に立つと、ハンス・ザックス作『角質化したゾイフリート』 Der hürnen Seufrid<sup>(8)</sup>, 『角質化したザイフ리트の歌』 Das Lied von Hürnen Seyfrid, 民衆本の『角質化したジークフリートにまつわる素晴らしい物語』 Eine wunderschöne Historie von dem gehörnten Siegfried<sup>(9)</sup>なども無視できない。もちろん『哀歌』 Klageも「昔の物語」を含む可能性はあるが、内容は『ニーベルンゲンの歌』の後日譚であり、英雄伝説の名残を持つ作品群とは性格を異にする。むしろ、当時の人びとの『ニーベルンゲンの歌』解釈の一つであると

考えるべきであろう。したがって重要ではあるものの、『哀歌』は本論文における考察から外す。なお引用部分の正書法は、技術上の支障がないかぎり、使用テキストの綴りに従う。韻文作品では、かっこ内の数字は詩節を表す。

## 2. 1. 『エッダ歌謡集』 およびその近傍

§ 12 『エッダ歌謡集』の中に収録されている資料から検討を始める（韻文資料の場合、かっこ内の数字は詩節を示す）。「フンディング殺しのヘルギの歌」のIとIIは、本来ニーベルンゲン伝説圏とは関係ない。しかし主人公のヘルギはシグムンドの息子とされ、腹違いの兄弟シンフィヨトリも登場する。これらの歌謡の存在は、ニーベルンゲン伝説が広く好まれて、他の伝説圏に侵入していった有様を示す貴重な資料であるが、「昔の物語」との関連は薄いので考察から外す。

これらに続く「シンフィヨトリの死について」は、先行する歌謡と次の歌謡の仲立ちをしている説明的散文である。文学作品としての価値は別として、シグルズと彼の他の兄弟との違いが明確に語られている点で貴重である。すなわち、英雄の父シグムンドはフラクランド<sup>(10)</sup>の王であり、息子シンフィヨトリ、ヘルギ、ハームンドたちは父の存命中に成人したらしい。彼らと別れて、父シグムンドは南下し再び妻を娶る。ここで生まれたのが、父を凌ぐ英雄であるシグルズであり、父の死後、息子は母の二度目の嫁ぎ先ヒャールプレク王の息子アールヴのもとで育つ。シグルズはシグムンドの立派な息子たちの中でも「最も優れ」framarstr, 「最も堂々とした戦さの王である」göfgastan herkonungaと称されている<sup>(11)</sup>。

この散文に続く「グリーピルの予言」は、「生い茂ったニーベルンゲンの樹になった最後の果実」であり「苦く不味い」とデ・フリースに酷評されている。<sup>(12)</sup> この歌謡において、シグルズは「王侯の中で最も高貴な生まれ」hæstr borinn / hveriom iqfriであり、「黄金を与えるに際し気前よく、逃亡を嫌う」giöfull af gulli, / enn glöggr flugar, 「言葉に賢く」í orðom spacr (7) なるである

うと讃えられている。「レギンの歌」では、小人のレギンが少年シグルズを育て、彼は若者に名剣グラムを与え、龍に姿を変えたファーヴニルを殺すよう唆す。かつての養父ヒールプレクはシグルズに援軍を与え、彼は父の仇討ちに成功する。「ファーヴニルの歌」の注目点は、瀕死の龍と英雄との謎めいた問答の内容である。死に臨んだ龍の問に対し、シグルズは名を隠し「高貴な獣」 *göfuct dyr* と自称する（この部分の解釈は諸説ある）。これに続けて曰く、母もいなければ父もなく、「全くの孤独だ」 *einn saman* (2)。さらに問われて、シグルズは自分と父の名を明かす。「私は父の遺産から遠く隔てられていて」 *til fiarri síac / mínom feðrmunom*, 「捕虜」 *hermuni* になっていたが、「囚人」 *haptr* ではなく「自由人として生きている」 *lauss lifi* (8)。鳥の言葉の理解、養育者殺害および龍の黄金やエーギルの兜<sup>(13)</sup>・甲冑・剣などの入手により、英雄は独立した人格を手に入れる。彼はこの時点で、自分の父の世代から縁を切った。以後シグルズは、自分の行いゆえに英雄と讃えられる。

このように、上記三つの歌謡はシグルズの身分に関して矛盾した記述を含んでいる。「グリーンピルの予言」において英雄はその出自を誉め讃えられているが、「レギンの歌」においては彼の育ちの卑しさが暗示され、「ファーヴニルの歌」においては生まれの卑しさまでが明示されている。これに続く「シグルドリーヴァの歌」には写本欠落箇所がある。英雄は成長しており、彼にふさわしい女性との出会いが歌われるが、その女性が「ファーヴニルの歌」と同様、雌鹿の山を意味するヒンダルフィアル山にいたことに注目したい。英雄はこの女性に近づくために超人的な冒険をする。

§ 13 冒頭部分不明の「シグルズの歌の断片」はゲンナルとホゲニの対話で始まり、そこではシグルズが誓いを破ったのでライン河の南で殺されたこと、それはブリュンヒルドの悪巧みに由来することが明らかにされる。グズルーンは彼の死を悼み、ブリュンヒルドは暗殺者を呪う。これに散文部分が続くが、そこにおいて、彼の死の場所についての異説と共通点が四つ挙げられる。彼が戸

外で殺されたとされているが、寝台で就寝中殺されたとの説もある。ドイツ人は殺害場所を森の中と考え、古謡にはその場所が民会であると歌われている。しかし共通しているのは、グューキの息子たちはシグルズを欺き、英雄が横たわり丸腰でいたときに殺した点である。

「グズルーンの歌I」においては英雄の素晴らしさ（葦と宝石にたとえられる）、ブリュンヒルドへの求婚旅行などが、断片的に触れられている。ブリュンヒルドと彼女の兄のアトリが災いの源であること、およびグズルーンとブリュンヒルトの運命が、最後に散文で語られる。「シグルズの短い歌」においては求婚旅行の顛末に続いて、ブリュンヒルドがシグルズ殺害を唆す。しかしグンナルもホグニも、信義の誓いに縛られていた。そこでもう一人の弟グトホルムが、妻の傍らで寝ていたシグルズの胸に剣を突き刺す。英雄の妻に対するいたわりの言葉と彼の死。グズルーンの悲しみの声を聞いて、ブリュンヒルドは喜ぶ。ブリュンヒルドは剣で自害を図り、グンナルたちの横死を予言して火葬される。「ブリュンヒルドの冥府行」においては、英雄とブリュンヒルドのかつての関係が語られる。

上記のおそらく独立していた諸歌謡から、シグルズ暗殺の顛末の一貫した道筋をたどるのは困難である。しかしおおよその輪郭はつかめる。英雄は妻の親族（姻族）の陰謀により暗殺されたが、それを企んだのは、かつて彼と関係があった女性であり、その女性は英雄の姻族の妻となっている。そしてそこにも陰謀があった。ただし英雄は、これらの陰謀に全く気付いていなかった。

以下は『ニーベルンゲンの歌』の後半部に相当する部分である。まず散文により、これからの物語の展開が要約される（「ニヴルング族の殺戮」）。未亡人グズルーンは、既にアトリの宮廷にいる。「グズルーンの歌II」において、彼女は宮廷に滞在していたショーズレク（ディエトリーヒに対応）に向かい、自分の運命を嘆く。かつての夫シグルズは、その素晴らしさゆえに、彼女の兄弟から嫉妬され殺された。彼は「緑の葦」grœnn laucr、「足の長い鹿」hiqrtr hábeinn、「輝く黄金」gull glóðrautt (2) にたとえられる。共通点は「葦」しか

存在しないが、「グズルーンの歌Ⅰ」(18) とほぼ同内容の比喩である。シグルズを殺されたグズルーンと暗殺者ゲンナルたちは、忘れ薬を飲み和解する。グズルーンは説得されてアトリの妻となる。アトリの不吉な夢が語られ、グズルーンはショーズレクと不義をはたらい、と侍女ヘルキヤに讒訴される。その内容が「グズルーンの歌Ⅲ」であり、ヘルキヤは神明裁判に負け沼に沈められる。この内容は、この歌謡集に姿を変えて何回か現れる女王の争いのパリエーションである。「オッドルーンの嘆き」の内容は、「グズルーンの歌」のⅠおよびⅡと同様、愛する男を失った女の嘆きである。

「ニヴルング族の殺戮」、「古いアトリの歌」および「新しいアトリの歌」の内容はほぼ同様であるが、「ニヴルング族の殺戮」は散文で述べられた解説部分であるとみなして差し支えあるまい。真の意味で英雄歌謡らしいのは後の二つ、とりわけ前者である。招待を受けた兄弟、妹からの警告、それにもかかわらず英雄たちは英雄であるがゆえに出立する。

ときにホグニの跡取りの 若き息子は言つて曰く  
「御両所の思うがままに行き給え お健やかに油断なく」

蹄の音も高らかに 勇士たちは山を越え  
見知らぬ森を通り抜け 馬銜嚙む駒を進ませぬ  
猛き心の武士は フンの土地を揺るがせつ  
馬に鞭あてまっしぐら 緑の野原を進みゆく

(「古いアトリの歌」12,5ff.)

アトリの屋敷に着いた彼らは事態の深刻さを悟るが、決して後戻りはしない。屋敷内での戦闘、切り取られた心臓、蛇牢での死、息子を殺し夫を殺して復讐する妹グズルーン。これらは二つの歌謡に共通であるが、「新しいアトリの歌」においては顛末がより詳しく語られ、復讐に助太刀が加わる。しばしば

指摘されているごとく、こちらの「アトリの歌」の英雄たちには、サガに登場する武装した誇り高い農民の面影が随所に現れている。グンナルとホグニは船に乗ってアトリの国に出かけるが、その道中の部分に迫力はあるものの、調子は「古いアトリの歌」とは明らかに異なる。

龍骨も折れよ 背が船底に触れよ  
 猛る心の男たちは 力にまかせて船を漕いだ  
 櫂の紐はちぎれ 櫂受けは砕け散った  
 上陸した彼らは 船を舫わずに[アトリの城へ]出発した

(「新しいアトリの歌」37)

一行の「猛々しさ」reiðir (原文においては名詞化された形容詞が用いられている) や、力強く船を漕ぐさま、そして生還を期待せず船を舫わぬさまは、『エッダ歌謡集』以外の北欧資料にも共通するので、記憶に留めておきたい。<sup>(14)</sup> また歴史と文学作品との相違は、例えば、この道行文の存在においてきわめて明白である。前号で述べたとおり、用いられているラテン語が非難されることはあっても、グレゴリウスの『歴史』はそれなりに力強い文体を持ち、文学への予感を孕んでいる。しかし、そこに見いだされるのはあくまで歴史叙述に奉仕する文体であり、文学作品のそれではない。文学は文学、歴史は歴史、との感が強くなるばかりである。

グズルーンはこの事件の後、自殺を図るが失敗する。彼女は別の王に嫁いで二人の息子を得る。ここから「グズルーンの唆し」が始まり、そこにおいては、シグルズは寝台の上で殺されたとされている。彼女にとり「最も悲しかった」sárastrのはシグルズの死、「最も怒りをおぼえた」grimmastrのはグンナルの死、「最も胸が痛んだ」hvassastrのはホグニの死であった(17)。彼女は息子たちを唆し、仇を討たせようとして「ハムジルの歌」続いてゆく。この歌謡にも、シグルズ、グンナル、ホグニおよびグズルーンの息子殺しについて触れられるが

(6-10), この歌はゴート人の伝説に由来するので取り扱わない。

§ 14 上記の一連の歌謡や散文は、ほとんど一つの写本 Codex Regius Nr.2365,4<sup>o</sup> と、それにきわめて近縁の写本に由来している。しかし各作品の内容も文体もまちまちであり、これらは成立年代も成立場所も異なるとしか考えられない。それは、例えばグズルーンの名が冠された三つの歌謡に明らかであろう。またこの写本には、ヘルギの名を冠した歌謡が三つ含まれている。所収順に並べると、以下のとおりである。

Helgaqviða Hundigsbana in fyrri Bl.20a,20 - 22a,3

Helgaqviða Hiqrvarðsonar Bl.22a,4 - 24a,12

Helgaqviða Hundigsbana qnnor Bl.24a,13 - 26b,19

これらは、本来ニーベルンゲン伝説とは関係あるとは思えないが、既に述べたとおり、in fyrriおよびqnnorは無理にこの伝説に関連づけてある。しかしこの関連づけには必然性が伴わず、それは両歌謡に挟まれる部分 (Bl.22a,4 - 24a,12) の存在によりさらに明らかになろう。したがって『エッタ歌謡集』の编者（とりあえずこのように名付けておく）は、内容には若干の注意を払ったであろうが、成立年代等には全く留意せず、物語の時系列におおよそ沿ってこれらの歌謡を単純に並べた、としか考えられない。<sup>(15)</sup> したがってこれらの作品間に、内容的矛盾が存在して当然である。

矛盾のもっとも甚だしいのが、先に指摘しておいたシグルズの身分である。多くの作品中において、彼の出自は高貴であるが、育ちは卑しい。英雄は人間ではなくて、鹿に育てられた痕跡すらあり、「グズルーン」の歌II」の比喩はそれを裏付けている。また彼は自由人であると自称するが、「ファーヴニルの歌」にあるごとく父の遺産を受け継いでいない。先述のとおりシグルズは王の息子であると言いつつ、父王の顔を知らず、幼年期を卑しい身分として過ごす。彼の



死についても矛盾がある。シグルズはブリュンヒルドの扇動により殺されたのか。または嫉妬により殺されたのか。殺害の場所に異説があるのは、「シグルズの歌断片」と「グズルーンの歌I」の中間散文部分において示されたとおりである。そして龍から手に入れた個々の宝物の行方も明らかにされていない。シグルズの死後、グナルとホグニは馬でアトリの館に行くのか、それとも船によるのか。グズルーンは兄弟と共に戦ったのか否か。この兄弟には息子がいたのか否か。もはやこれ以上矛盾を列挙する必要はあるまい<sup>(16)</sup>。『エッダ歌謡集』の成立からして、矛盾が生じるのは当然であるから。しかしアイスランドの人びと全員が、これらの矛盾をそのまま認めていたとは考えられない。『ヴォルスンガー族のサガ』や『ベルンのシズレクのサガ』のごとく、ある程度統一的内容を有する二つの散文作品が成立する要因の一つが、ここに存在したのではあるまいか。

§ 15 『ヴォルスンガー族のサガ』は、『エッダ歌謡集』の欠落部分を埋める資料として有用である。しかし、この作品に補完物としての役割のみを負わせるのは公平ではあるまい。アイスランドにおける、ニーベルンゲン伝説解釈の貴重な遺産の一つであるとみなすべきである。以下のかっこの中の数字は章を表す。

シグルズの誕生と幼年時代に関して、このサガには取り立てて新しいことがらは述べられていない。夫の戦死後、未亡人は再婚するが亡夫の息子を産み、幼児は現在の夫の父ヒャールプレク王に預けられる。この子が「鋭い目つきを」hvǫssu augu (13) もって眺めるのを王は喜び、シグルズと命名した。彼はそこで、「大いに可愛がられて」af mikilli ást (13) 育った。シグルズはさらにレギンに預けられ、レギンは養子を王子にふさわしく育てたが、あるとき彼はシグルズに問う。おまえの父親の財産はどこにあるのか、おまえが王の「厩番」hestasveinnであり、「浮浪者」hlauparar (13) のごとくさまようのをどう思うのか、と。彼はシグルズを扇動した。ここで、シグルズが名馬グラニと名剣ゲ

ラムを手に入れるエピソードが挟まる。シグルズは成長し、すべての人に「可愛がられた」... ástsælli (15)。グリーピルの予言、シグルズの仇討ち、ファーズニル殺害、瀕死の龍とシグルズの対話（「高貴な獣」 gøfugt dyrとしての名乗り、自分が自由人であることの強調、自分の宝物が死をもたらすと告げる龍の予言）も『エツダ歌謡集』と類似した内容である。<sup>(17)</sup> これに続いてシグルズは龍の心臓の一部を食し残りを保存しておくが、これが彼の死の伏線となる。龍の宝を手に入れたシグルズは、ブリュンヒルドを捜しに出発する (19)。

このように、歌謡とサガにはかなりの共通点があり、前者の矛盾は後者にも引き継がれている。しかし、少年期のシグルズが人びとに可愛がられた点や、伏線の存在や行動の理由付けなどは散文に独特である。

ヒンダルフィアルに到着したシグルズは、炎と楯に囲まれて寝ている完全武装の武士を発見する。鎧兜を脱がすと、それはブリュンヒルドという名の女性であった。彼女は彼に知恵を授けた。このあたりが『エツダ歌謡集』に欠落が多い箇所である。

シグルズとブリュンヒルドは結婚し誓いを交わす (20)。シグルズは彼女と別れて、さらに旅を続ける。彼の武器には龍が描かれ、一目でそれが龍殺しの英雄であることが知れた。シグルズは「宮廷的物腰において」 at kurteisi ok allri hofersku、万人に勝っていた。また武術や体格に優れていたばかりでなく、未来を知り、物惜しみをしなかった (22)。この箇所に、大陸からの宮廷文化の影響を見るべきであろう。シグルズはハイミルの館に旅をし、ブズリの娘のブリュンヒルドという名のヴァルクューレと結婚する (23-24)。このあたりにおけるブリュンヒルドの取扱いは、いかにも奇妙である。これは、「シグルドリーヴァの歌」の劣悪な保存状態と、関連するのかもしれない。

ライン河の南に君臨するグューキ王の妻はグリームヒルド、息子はグンナル、ホグニ、グトホルム、娘はグズルーンという名であった。またブズリはグューキより強大な王であり、息子アトリはブリュンヒルドの兄である。グズルーンは美しい鷹の夢を見るが、それを打ち明ける相手は侍女である。ブリュン

ヒルドも夢解きを行い、グズルーンの運命を予告する (25)。予言夢のモチーフは、『ニーベルンゲンの歌』と共通している。

シグルズがキューキの館にやってきた。王の妻グリームヒルドは、黄金を手に入れる目的で、シグルズに酒を飲ませてブリュンヒルドを忘れさせる。彼はそこに留まり、ゲンナルと義兄弟の誓いを交わす。そしてシグルズは、新たに妻とした義兄弟の妹グズルーンにファーヴニルの心臓の残りを与えたので、彼女は残忍で賢くなった。ある日グリームヒルドは息子ゲンナルに、彼がブリュンヒルドに求婚しシグルズを同道するよう勧めた (26)。炎を越えるための身代わり、シグルズとブリュンヒルドの間に置かれた抜き身の剣、彼らは指輪を交換した。帰館後、シグルズとグズルーン、ゲンナルとブリュンヒルドの結婚が行われた (27)。この部分には、後の惨劇を引き起こす要因が出そろっている。両王妃による諍いの舞台準備はすべて整った。

ある日のこと二人の王妃は水浴びをした。ところがブリュンヒルドは、はるか上流に行ってしまう。グズルーンが訳を尋ねると、ゲンナルはシグルズより優れた英雄であり、シグルズはヒャールプレクの「奴隸」*þræll*にすぎないとブリュンヒルドは答える。グズルーンは怒り、ブリュンヒルドの最初の夫はシグルズであると反論し、証拠として指輪を示す。翌日も言い争いは続く (28)。その後ブリュンヒルドは寝込むので、ゲンナルは見舞いに来る。ブリュンヒルドは彼に、求婚のために炎を越えたのは他者ならぬシグルズであろうと言う。ゲンナルは彼女を殺そうとし、ホグニは彼女を鎖に繋ぐ。彼女は大きな声で嘆いた。グズルーンは、ゲンナルとホグニに彼女を慰めるよう頼むが、失敗。最後にシグルズがブリュンヒルドを訪ねる。彼女はシグルズが記憶を取り戻すよう試みるが、無益であった。グズルーンよりブリュンヒルドを愛しているシグルズは、重い気持ちで部屋を去った。ブリュンヒルドはゲンナルに、二人の夫を持った自分は死ぬつもりであると告げる (29)。

§ 16 これ以後の部分は、しばらくの間『エッダ歌謡集』と内容が共通する。

ブリュンヒルドの唆しによるシグルズの殺害。グズルーンの嘆きと、ブリュンヒルドの高笑い、ブリュンヒルドはあらためてゲンナルを呪い、グズルーンは、夫が一族の手に掛かったと嘆く (30)。ブリュンヒルドはゲンナルを非難し死を望む。彼女はゲンナルたちを待ち受ける運命を告げ、シグルズのために薪の山を築かせる。「シグルズの亡骸は、昔の異教風のやり方で葬られた」*Nú er búit um lík Sigurþar at fornum síþ*. 遺体が火に包まれると、ブリュンヒルドも火の中に入って死んだ (31)。『ヴォルスングー族のサガ』の内容はたしかに異教的である。しかしこの部分は同時に、サガがキリスト教の時代に入ってから書かれたことを示しており、その点は常に心しておかねばなるまい。

シグルズが死んで、グズルーンは彼を讃えつつ嘆く（用いられる比喩は「グズルーンの歌II」と同様）。そして、彼の死の原因は自分の兄弟の嫉妬にあると言う。この後グズルーンは森に逃れ、とある王侯のもとに身を寄せる。グリームヒルトは、息子にグズルーンとの和解を勧告した。彼女は初め和解を拒否したが、グリームヒルトは毒の飲物 *meinsamligan drykk* を飲ませたので和解は成立した。母は娘にアトリ王との結婚を勧めるが、娘は拒否。しかしついにグズルーンは折れ結婚はしたが、心楽しななかった (32)。グズルーンにアトリとの結婚を承知させ、不幸を増幅するのはまたも兄弟の母グリームヒルトである。

ある日アトリは不吉な夢を見る。グズルーンは、自分たち夫婦の不幸と息子たちの死であるとその夢を解く。シグルズの黄金を我が物にしようとアトリは家臣たちと密議をこらし、ゲンナルたちを宴会に招待しようと決定する。それを知ったグズルーンは、警告を刻み狼の毛を巻き付けた指輪を使者ヴィンギに託す。その後の経緯 (34-38) は『エッダ歌謡集』の新しい層に属する「新しいアトリの歌」に類似している。また一方では宮廷風シグルズや鷹狩りや鷹の夢などが登場し、他方ではグリームヒルトやゴトホルムなどの古い層に属する人物が存在する。新旧の並存はこのサガ成立の複雑さを暗示している。矛盾する伝承がこの作品の中に流れ込んでいるに違いない。ちなみに、『エッダ歌謡

集』においても『ヴォルスンゲー族のサガ』においても、シグルズの皮膚の角質化には触れられていない。

## 2.2. 『ベルンのシズレクのサガ』およびその近傍

§17 この項においては、上記以外の北欧資料（『ペーオウルフ』を含む）を取り扱う。この分類には特別な学問的根拠は存在しないが、本論文の目的を満たすためにはこれで十分である。

アイスランドにおけるニーベルンゲン伝説を語るには、『ベルンのシズレクのサガ』を忘れてはなるまい。このサガはゲルマン英雄伝説の集大成の趣があり、その中ほどにニーベルンゲン伝説が断続的に挿入されている。ただし『エッダ歌謡集』の英雄歌謡や『ヴォルスンゲー族のサガ』と重複部分も少なくないので、これらとの異同のみを記す。

『シズレクのサガ』のニーベルンゲン伝説関連部分は、英雄の父の世代から始まる。英雄は争いに巻き込まれ、王子でありながら捨てられ鹿に育てられる。ここにおいて英雄の出自が高貴であり卑賤であるという二重性と鹿との関連が、一応合理的に説明される。また若い英雄を育てた鍛冶屋の名前と龍の名前が、その他の北欧伝承とは異なる。さらに英雄は、皆に愛される少年ではなかった。またドイツの伝承に見られる皮膚の角質化についても触れられている。ブリュンヒルトと会った後に、英雄シグルズはある王に仕え、そこでシズレクと戦う。これは『エッダ歌謡集』等と異なるが、おそらくシズレク伝説との融合のためになされた変更であろう。注目すべきは、シグルズが主人に仕えた点である。彼の身分は常に疑問に晒されている。またこのサガのシグルズは、決して無敵の英雄ではない。彼はゴート人の王の策略により敗北を喫する。シグルズはニヴルング人の国に赴き、グンナルとホグニの妹グリームヒルトを妻にする。これにグンナルとブリュンヒルトとの結婚が続く。その顛末には『ニーベルンゲンの歌』と似通った部分があるが、洗練の度合いははるかに劣る。二人の王妃の争いもドイツの叙事詩と類似しているが、シグルズの出自に関して

鹿への言及がある。英雄はホグニにより暗殺された。その準備として、ホグニは狩における料理を塩辛くした。シグルズに小川から水を飲ませるためである。

未亡人グリーンヒルドとの結婚のため、アッティラは自らグンナルを訪問する。彼の一行の面々にシグルズの遺産が贈与された。しかしアッティラは英雄の黄金を忘れてはいない。それを手に入れようという妻の提案に同調し、アッティラはグンナルたちを招待する。兄弟たちは、反対にもかかわらず出発する。旅の途中で、ホグニは不吉な予言をする海の女と渡し守りを殺す。彼は激しく船を漕ぎ櫂が折れる。一行はロジンゲイルに歓待され、濡れた衣服を乾かし多くの贈り物を受けた。アッティラの城に到着した一行は、果樹園で歓待を受ける。しかし、グリーンヒルドがアッティラとの間になした息子にホグニは殴打され、ここに戦いが始まる。王妃は果樹園の入口に罫を仕掛け、ニヴルング人たちを殺させる。グンナルは早々と捕らえられて、蛇の館で殺されてしまう。それに対し、ホグニの活躍は際立っている。ロジンゲイルの死をきっかけとして、シズレクも戦闘に参加しホグニと戦う。この戦いの最中にホグニの出生の怪しさが暗示される。シズレクは火を吐く怪人であるが、その彼にとっても、怪我人の口に火を突き込む悪魔のごときグリーンヒルドはおぞましく、ついには彼女を切り殺してしまった。重傷を負ったホグニは、ある女を身ごもらせて息絶える。ホグニの遺児アルドリアンは策を用い、黄金の亡者アッティラを洞窟に閉じ込めて飢え死にさせ、父の仇を討つ。

このサガは北方資料でありながら『ニーベルンゲンの歌』との関連も明らかに見られ、同時に『ヴォルスング一族のサガ』と同様に「新しいアトリの歌」との共通部分も存在する。おそらくこの作品もまた、時と所を異にする複数の源泉から成立したのであろう。

§ 18 アイスランドの南東に、フェロー諸島は位置している。ここにはニーベルンゲン伝説に関する資料が、舞踊の際に歌われた歌謡の形で残っている。そ

れらは十七世紀中葉から十九世紀中葉にかけて収集された。本論文で引用している底本の編集対訳者フース Klaus Fuss の前書きによると、歌謡の口承は、部分的には十四世紀にまで遡れるという。文学史上の資料としても、またニーベルンゲン伝説の生命力の証としても、これらの歌謡は特記に値する。このバラッドの内容は他の作品（とりわけ『シズレクのサガ』）と重複する部分が多いので、目につく異同のみを指摘するに留める。

最初の歌は、英雄 Sjúrdur<sup>(18)</sup> の誕生と幼年時代を取り扱う。彼の両親の挿話は、『エッダ歌謡集』や『ヴォルスンゲー族のサガ』とほぼ同じである。しかし鍛冶屋とその兄について、父親 Sigmundur は知っている。英雄がこの鍛冶屋に剣を鍛え直させる挿話も、この歌謡の特徴であろう。これに続くのが Brinhild にまつわる歌である。多くの求婚者が集まるので、彼女は父王に頼み、炎で彼女の回りを取り囲ませる。Sjúrdur と Brinhild の間には娘が生まれる。彼女は Brinhild の怒りの最初の対象となり、母親に殺される。Brinhild を慰めに人びとが集まるのは、『ヴォルスンゲー族のサガ』に類似している。食事に塩を入れさせるのは Brinhild の知恵である。英雄の殺害に手を下したのは、Høgni と Gunnar の二人である。物語は第三の歌に続く。未亡人 Guðrun は復讐のため Artala に嫁ぐ。彼女の復讐の経過は『シズレクのサガ』に類似している。しかし魔術が大きな位置を占めている。龍に姿を変える怪人（物）Tíðrikur が登場し、Guðrun は魔女である。グロテスクな、Sjúrdur の首の挿話も語られる。Høgni の評価がこの歌では高い。Høgni の息子の復讐の対象は、Artala と Guðrun の夫婦両名である。

このように『シズレクのサガ』もフェロー諸島の舞踏歌も、共に古い部分を残している。しかし同時に、『ニーベルンゲンの歌』に代表される宮廷的なものの影響も、完全に否定することはできない。サガと舞踏歌とドイツの叙事詩の、相互影響の可能性を想定するのが無難であろう。

§ 19 デンマークに残されたニーベルンゲン伝説を、「デンマーク古代歌謡集」

Danmarks gamle Folkeviser (DgF) の名のもとに収録されている作品の中に探る。登場人物の名前には統一性がない。この歌謡群の内容は、全体として『ペルンのシズレクのサガ』に似ているが、その一部には著しい特徴がある。

- ・ DgF 2: Syffuertt (別の歌謡では Siuord, Syfred 等と表記) は母のため、義理の父を討ち果たす。彼は冒険を求めて宮廷に行こうと欲する (1)。母は彼に火を吐く馬を与え、英雄は出発する (2-8)。これは気性の激しい馬であり、彼を宮殿に連れて行った (9-11)。王が甥 Syffuertt の到着を出迎える前に<sup>(19)</sup>、彼は馬で城壁を飛び越えた (12-16)。
- ・ DgF 3: Syffuertt は Bryneld を手に入れ、彼女を義兄弟の Hagenn (Haffuen) に渡す (1-2)。Bryneld と Sieneld が共に洗濯しているとき、Syffuertt の指輪をめぐって両王妃は喧嘩する (3-6)。Bryneld は事情を知り、Hagenn に Syffuertt の首を所望する (7-11)。Hagenn は Syffuertt が不死身であることを知っているので望みを断る。しかし懇望に負け、策略を用い Syffuertt から名剣 Aadellring を借り受けてそれで英雄の首をはねる (12-23)。Hagenn は首を Bryneld に見せるが、彼は義兄弟殺しを悔い彼女を殺して自殺する。この乙女のために二人の王子が落命した (24-31)。
- ・ DgF 4: 異国に嫁ぎ、殺された父と兄弟の仇討ちをした Ellin という女性の物語である。彼女は最後に修道院に入る。
- ・ DgF 5: (王妃) Kremold は宴会を準備し、Hagen や楽師 Falquor たちを招待する (1-3)。Hagen の母 Buodel は鳥が死ぬ夢を見て警告するが、英雄たちは出発する (4-5)。旅の途中の、Hagen と海の女、Hagen と渡し守りの冒険 (6-17)。一行は嵐の中を航海し、櫂は折れたが、彼らは Kremold の城に到着する (18-20)。城の番人は一行が武装しているのを見る (21-23; 異本では、



番人が警告を発する)。Kremoldは一行を歓迎する。ただしHagenはSeifridを殺したため歓迎されない(24-26)。王Kanselinは競走を催し、Hagenを殺そうとする(27-28)。戦闘が始まり、一行の勇者たちは戦う(29-35)。Kanselinは倒れるが、Hagenは戦い続ける。彼の剣は戦闘中に失われたが、Obbe Iernが彼に自分の剣を渡す(36-43)。

- ・ DgF 7: Bernの王Diderickは、Isse王の末の息子Siuordの噂を聞き、彼と試合をしようと旅に出る(1-5)。『シズレクのサガ』を連想させる内容である。この歌謡には、Siuordと彼の甥<sup>(20)</sup>が戦う場面が登場する。
- ・ DgF 8: Diderickに従う英雄紹介のカタログ的部分である。
- ・ DgF 9: Diderickは、龍の洞窟でSyfred所有の名剣Adel-ryngを発見した。Syfredは、龍に殺されたらしい。
- ・ DgF 11: 殺されたSeffredの息子と巨人との戦い。乙女を戦って手に入れるために、息子は父の名剣Bertingを欲する。なお、Seffredを殺したのは、GierdとArlandである。
- ・ DgF 16: 後世の作品で、婚礼に招かれた英雄たちの名前が挙げられている。そこでは、師匠Hyldebrandのみならず、Kreem-moltやBrynildたちにも言及されている。
- ・ DgF 17: 後世の作品で、Harogenはデンマーク側の勇士とされている。
- ・ DgF 18: Sejver(異本ではSieddffuer)の娘に求婚者が現れる。この歌謡においても、英雄は龍に殺されている。

- ・ DgF 22: Sigurd王の娘の誘拐と、王子Regnfredによる彼女の発見。Sigurdという名と彼の落胆ぶりが印象的。
- ・ DgF 23: 前記DgF 22と同様の題材。娘の父親はKarllと称し、農民たちに殺されて蛇の宮殿に投げ込まれた。母はBrynnnyll（異本ではKremolt）である。

ジークフリートに相当する人物は、すっかり当地の英雄と化している。運命的な女性と結婚するのは『ニーベルンゲンの歌』のハゲネに相当する人物であり、彼はグンテルの役割も兼ねている。DgF 4以下は登場人物の名が替わる。特にDgF 5にはフォルケールを思わせる人物が登場し、ドイツの叙事詩との関連を強く想像させる。この歌においては黄金の要求ではなくて、夫の仇討ちが主題になる。『シズレクのサガ』との共通性が目立つが、デンマークの歌謡にとりわけ特徴的なのはDgF 9以下の記述である。なんと、ジークフリートに相当する人物は龍を殺すのではなくて、殺されるのであるから。<sup>(21)</sup>

§ 20 『ベーオウルフ』は古代英語の作品であるが、デンマーク資料と並べて論じておく。怪物の住処からの帰り道、王の家臣の一人が即興でベーオウルフを讃える歌を作る。その中で龍退治の英雄の伝説に関わる物語が語られ、『ベーオウルフ』の第874詩行以降がそれに該当する。原文はかなり混乱しているが、その内容をまとめると、以下のとおりである。

ウェルスWælsの息子にシェムンドSigemundという勇士がいた。彼は諸処に放浪し勲を挙げたが、それについて人びとに確かなことは知られていない。シェムンドには「战友」nyd-gesteallanである (V.882)、フィテラFitelaがいた。シェムンドは彼の「母方のオジ」eam (V.881) であり、共に戦って巨人たちを殺したことがある。しかしあるときシェムンドは、「灰色の岩の下に... 敢えて一人で行き」under hārne stān / ... / āna genêðde (V.887f.), 「剣が壁に突き立った」

hit (=swurd) on wealle ætstôd (V.891) ほど力強く「龍」wyrm/dracaを突き刺して殺した。死んだ龍は熔けてしまう。彼は龍の宝を手に入れ、それを船に積み込む。彼の誉れは上がった。

この断片的な挿話については、次の四点に注目すべきであろう。まず第一点は登場人物の関係である。これは『エツダ歌謡集』中の「シンフィヨトリの死について」に類似している。シェムンドはアイスランドのシグムンドに、フィテラはシンフィヨトリに相当することは語形からも明らかであるが、『ベーオウルフ』においては、この二人は親子ではなくて母方のオジ・オイの関係である。第二点は、龍殺しの英雄がジークフリート (=ジーフリト等) より一世代上の人物となっている点である。すなわち『ベーオウルフ』は、伝説の上でもまた歴史的にも、ジークフリートが生まれる前の時代を反映している。第三点として龍が死んで熔けること、最後に第四点として、『ベーオウルフ』が成立した年代 (八世紀?) が挙げられる。本論文においては、第一点 (母方のオジ・オイ) および第三点 (龍と熱) に特に注目したい。

[以下次号]

## 注

- (1) この議論の根拠としては、「シグルズの歌 断片」第5詩節を挙げておけば十分であろう。また、伝説がドイツの地起源である保証は存在しないが、他の地で発生した可能性はきわめて低い。さらに議論を進めると成立史の問題に触れざるを得ないので、本論文ではこれ以上詳しく扱わない。
- (2) いくつかの作品名は現行邦訳のそれとは異なるが、先人の苦心を無視する意図は全くない。作品内容をよりの確に伝えんとする工夫である、と理解されたい。
- (3) Die Völsungasaga. Nach Bugges Text mit Einleitung und Glossar. Hrsg. von Wilhelm Ranisch. Berlin (Mayer & Müller) 1891. このサガには、シグルズの娘の行く末が語られる Ragnars saga loðbrókarがしばしば後置される。しかしこれは、デンマーク王家と英雄を結びつける後世の作為としか考えられず、歴史的価値は認められるものの、伝説資料として採用する必要はない。
- (4) Didriks saga af Bern. Utgivet for samfund til udgivelse af gammel nordisk litteratur ved Henrik Bertelsen. I/II København 1905-11/1908-11. このサガはノルウェー起源であろうと推

- 測されているが、「作者」はアイスランド人であろうと考えられている。それゆえアイスランド資料として取り扱う〔以下、ときに『シズレクのサガ』と略称〕。
- (5) Fuss, Klaus: Die färöischen Lieder der Nibelungensage. Text, Lesarten und Übersetzung. 1.,2.,3. Bände. Göppingen (Kümmerle) 1985/87 (GAG 427/8/9) によったが、随時 Lockwood, W.B.: Die färöischen Sigurdlieder. Nach der Sandoyarbók. Mit Grammatik und Glossar. Tórshavn 1983. を参考にした。
- (6) Holzapfel, Otto: Die dänischen Nibelungenballaden. Texte und Kommentare. Göppingen (Kümmerle) 1974 (GAG 122) によったが、随時 Danmarks gamle Folkeviser. Udgivet af Svend Grundtvig. Kjøbenhavn 1853. を参考にした。
- (7) Waltharius. In: MGH PP VI, 1. Mit Unterstützung von Otto Schumann, hrsg. von Karl Strecker. Weimar (Böhlau) 1951, S.1-85.
- (8) Sachs, Hans: Der hürnen Seufrid. Tragoedie in sieben Acten. Zum ersten Male nach der Handschrift des Dichters herausgegeben. Halle a.S. (Niemeyer) 1880. 「角質化」は訳語として生硬であるが、他に適語が見つからない。
- (9) 主として Das Lied vom Hürnen Seyfrid. Nach der Druckredaction des 16. Jahrhunderts. Mit einem Anhang: Das Volksbuch vom gehörnten Siegfried nach der ältesten Ausgabe (1726). Hrsg. v. Wolfgang Golther. Halle a.S. (Niemeyer) 1889によったが、随時 Das Lied vom Hürnen Seyfrid. Critical edition with introduction and notes by K. C. King. Manchester 1958. を参考にした。
- (10) 伝説はフランク族起源であろうと、Gering/Sijmonsは推測している。Gering, Hugo: Kommentar zu den Liedern der Edda. Nach dem Tode des Verfassers hrsg. von B. Sijmons. 2. Hälfte: Heldenlieder. Halle (Waisenhaus) 1931 (Germanistische Handbibliothek VII 3,2) 〔以下、Gering/Sijmons Kommentar 2と略記〕, S.136.
- (11) 「シンフィヨトリの死について」は独立した作品ではなく、内容も関連諸作品との比較において考察すべきである。See, Klaus von See / La Farge, Beatrice / Gerhold, Wolfgang / Picard, Eve / Schultz, Katja: Kommentar zu den Liedern der Edda Bd.5. Heidelberg (Universitätverlag Winter) 2006. 〔以下、See Kommentar Bd.5と略記〕, S.111-131.
- (12) Vries, Jan de: Altnordische Literaturgeschichte. Bd.2: Die Literatur von etwa 1150 bis 1300. Die Spätzeit nach 1300. 2., völlig neubearb. Aufl. Berlin 1967, S.155.
- (13) これは「相手に恐怖を呼び起こす呪」であるという。Vgl. Gering/Sijmons Kommentar 2, S.173f., See Kommentar Bd.5, S.442f.
- (14) 「古いアトリの歌」に船旅の部分が欠けているのが、むしろ奇異でさえある。「古いアトリの歌」のごとく森を抜けるほうが古いのか、「船旅」が伝承の過程で欠落したのかは不明。ヤーコプ・グリムはDeutsche Rechtsaltertümer (Bd.2, S.9f.) において、国の境界としての森に言及している。森も海（あるいは河）も、境界としての機能を果たしている点を確認するのみで満足する他はない。
- (15) 「編者」はそれ以上の何か（内容の調整等）を行ったかもしれないが、本論文において、それは問題にしない。
- (16) 楯と火に囲まれた中から、シグルズにより救いだされた女性についても、見方によ

っては矛盾が存在する。具体的には、Sigrdrifaとは誰かという問題である。常識に従えば、これはBrynhildrの言い換えであろう。私の調べたかぎり、諸家もその解釈で満足している。そして、それが正しければ、これは矛盾でもなければ問題ともならない。ただしその解釈では、なにゆえSigrdrifaがBrynhildrの言い換えになるのか、という点が説明不足であり、なおかつ、「シグルドリーヴァの歌」内でBrynhildrという固有名詞が出現しない理由が不明のまま残されてしまう。「シグルドリーヴァの歌」は保存状態が劣悪であり、本来の形は不明である。Neckel/Kuhn等、諸家による再建が大きく誤っているとは思われず、私にとっては大きな謎として残る箇所である。Vgl. See Kommentar Bd.5, S.546.

- (17) ファーヴニルとの戦いにおいて、サガにも *gofugt dyr* とあるが、この語句の解釈は難しい。ヘルマン Paul Herrmann は訳本中で、人間の姿をした自分を龍と比べてこのように述べている、と注を付けている。すなわち「高貴な獣」とは人間である。しかし管見では、シグルズと「鹿」との関連も否定し難い。Die Geschichte von den Völsungen. In: Isländische Heldenromane. Übertr. von Paul Herrmann. Düsseldorf/Köln (Diederich) 1966 (Slg. Thule Bd. 21), S.39-136, S.77.
- (18) 私は残念ながら、(古)フェロー語および(古)デンマークに昏い、Lockwood (注5) 以外の参考書 (例えば *Færøsk Anthologi. Ved V. U. Hammershaimb. I Text samt Historisk og grammatisk indledning. København 1891*) にも当たったが、とりわけ固有名詞の日本語表記は私の力量をはるかに超えている。したがって、両言語が用いられている作品の固有名詞は原語をもって表記し、その際語尾を残した形を用いた。§19および§20の内容について、篤学の士による詳細な議論の登場を心より望む。
- (19) 原文ではデンマークの王妃が、英雄が自分の「姉妹の息子」*søster-søn* であるという。したがって英雄から見れば、デンマーク王は自分の母方のオジである。
- (20) 原文では Siuord が Humelenn を「姉妹の息子」*søster-søn* であるという。Humelenn から見れば、英雄は自分の母方のオジである。前注参照。
- (21) これら「デンマーク古代歌謡」と、どのような関係にあるかは不明であるが、史書 *Gesta Danorum* cap. XIII にはニーベルンゲン伝説に基づく歌謡が存在した痕跡が残されている。すなわち、グリムヒルドが兄弟に対して行った陰謀についての有名な歌を朗唱して、ある詩人は陰謀が企まれていることを警告した、という。ただし、その歌の内容に関してこれ以上は不明である。Saxonis Grammatici *Gesta Danorum*. Hrsg. von Alfred Holder. Straßburg (Trübner) 1886, S.427.